



TITLE:

大名城郭普請許可制について

AUTHOR(S):

藤井, 讓治

CITATION:

藤井, 讓治. 大名城郭普請許可制について. 人文學報 1990, 66: 81-100

ISSUE DATE:

1990-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48328>

RIGHT:

大名城郭普請許可制について

藤 井 讓 治

はじめに

I 武家諸法度の城郭規定

II 慶長期における城郭普請

III 元和・寛永前期の城郭普請許可

1 法度への大名の対応

2 普請許可の主体と対象

IV 武家諸法度改訂以降の城郭普請許可

おわりに

は じ め に

近世前期、江戸幕府が諸大名の城郭に対して採った政策には、大きく三つの政策がある。第一は、大坂夏の陣が終った直後の慶長二十年（1615）に出されたいわゆる一国一城令である。第二は、同じ年に出された武家諸法度における城郭規定、新城の禁止と城郭修築の許可制である。第三は、正保二年（1645）に国絵図とともに作成を命じられた城絵図の提出である。

第一の一国一城令については、古く高柳光寿氏の研究¹⁾があり、そこでは、家康が城郭を重要視する観念を持っていたこと、元和元年（1615）の一国一城令は畿内・山陽・山陰・南海・西海の外様大名を対象としたものであったこと²⁾、出羽・陸奥がこの令の対象とならなかったのは秀吉の奥羽仕置にあたって城郭破却がなされていたからであること、さらに元和令以降も城郭破却の例のあることなどが明らかにされている。その後の研究で若干の事例は増えたものの、一国一城令をめぐる研究はそれほど大きくは進展していない。第三の正保の城絵図については、近年復刻が進められ、正保の国絵図とともにその軍事的特質が注目されてきているが³⁾、まだ政治史全体のなかに位置付けられるには至っていない。

第二の武家諸法度の新城の禁止と城郭修築規定については、城戸久氏が「江戸幕府の諸侯城郭に対する政策について」という論稿⁴⁾で論じられている。そこでの氏の論点は、第一に一国一城令の適用は諸侯一律ではなかったこと、第二に慶長二十年の武家諸法度においては新城は原則的に禁止され、修補は許可制であったが、寛永十二年（1635）の武家諸法度では作事に関しては緩和され、宝永七年（1710）の法度では作事に関する修築は制限を受けないまでに緩和されたが、享保二年（1717）の武家諸法度では寛永十二年のものに復したこと、第三に新城の

禁止にも拘らず、江戸時代を通じてかなりの数の新城経営がなされていること、第四に城郭修補の例をあげ寛永十二年の法度以前には作事についても修築の許可が必要であったが、寛永十二年の法度以降はその必要がなくなったことと修築の名目で新営された城郭のあること、第五には諸侯の城郭新営・修築への幕府の援助のあったことであった。本稿では、城戸氏が明らかにされた諸論点を前提としつつ、幕府・将軍による大名の城郭普請許可制をめぐる問題を取り上げる。

ところで、これまで幕府による大名城郭に対する政策が問題とされる場合の視角は、いずれも幕府による大名統制策の観点から取り上げられてきたが、本稿では、そうした側面とともに幕府・将軍による軍事力掌握の特質の問題として、また許可制に現れる将軍と老中の権限分割とその特質に注目していく。

- 1) 「元和一国一城令」(『史学雑誌』33-11, 1922年)。
- 2) この点では、一門大名である越前福井松平氏のもとで敦賀城を破却した例があり、なお若干の検討の余地が残されている(『敦賀市史』通史編上参照)。
- 3) 正保の城絵図の軍事的性格については、矢守一彦氏が『都市図の歴史—日本編—』(講談社, 1974年)の第三章二「幕府撰正保城絵図」のなかで、また川村博忠氏が『江戸幕府撰国絵図の研究』(古今書院, 1984年)の第二篇第三章第五節三「城絵図」で述べられている。なお正保城絵図は、現在国立公文書館から複製されており、その概要については平井芳男氏の「正保城絵図の刊行について」(『北の丸』7号, 1976年)を参照されたい。
- 4) 『日本城郭全集』第2巻, 1960年。なおこの論稿の前提となったものに同氏の「元和一国一城令と武家法度の城郭禁令について」・「江戸時代における諸侯城郭の新営と修築について」(『建築学会論文集』33, 1944年)がある。なお、近世初期の幕府公役による城郭普請の問題を扱ったものに、白峰句氏の「慶長・元和・寛永期の近畿圏における諸城築城について—幕府公役普請の実態—」(『紀尾井史学』4, 1984年)がある。

I 武家諸法度の城郭規定

まず、武家諸法度の大名の城郭についての規定から見ていこう。慶長二十年(1615)六月の武家諸法度の第六条には、

一諸国居城雖為修補, 必可言上, 況新儀之構営堅令停止事,

城過百雉, 国之害也, 峻壘凌隄, 大乱本也,

とあり¹⁾, 居城修補に際しては必ず「言上」することと、新規に城を営むことが禁じられている。寛永六年(1629)九月, 大御所徳川秀忠の手で、慶長の武家諸法度は一部改訂され、慶長の武家諸法度の第五条の「自今以後, 国人之外, 不可交置他国者事」の簡条が削除されたため、城郭についての規定は第五条となるが、条文には変化はなかった²⁾。

武家諸法度の条文にかなり大きな変化がみられるのは、大御所秀忠の死後、寛永十二年六月

に徳川家光によって改訂された武家諸法度においてである。この法度においては、大名の城郭についての箇条は、新しく加わった参勤交替を制度化した箇条につづく第三条に据えられた³⁾。

一新儀之城郭構営堅止之、居城之隍壘石壁以下敗壞之時、達奉行所、可受其旨也、櫓塀門等之分者、如先規可修補事、

この箇条では、新規の城郭の禁止と、居城の「隍壘石壁」すなわち堀・土壘・石垣が敗壞したときには、「奉行所」に達し、その意向を受けることを命じ、櫓・塀・門についてはこれまでのように修補することを規定している。

慶長二十年の法度と寛永十二年の法度は、ともに新城建設を禁止し、修築に際しては幕府の許可を受けることを命じている点で、同趣旨であるが、文意を細かに見ると、いくつかの点で変化が見られる。その第一点は、慶長二十年の法度では、居城修築については「必可言上」と言外にはあるが將軍へ届け出ることを命じているのに対し、寛永十二年の法度では「達奉行所」とし、届け出る先を「奉行所」＝老中としている点である。第二の点は、慶長二十年の法度では、言上する先が將軍であることから当然であるが、その許可を出す主体が將軍であるのに対し、寛永十二年の法度では「達奉行所、可受其旨」とあることから、その許可は「奉行所」＝老中によって出されることになった点である。いいかえれば、大名居城の修築許可は、老中の専管事項となったのである。第三の点は、慶長二十年の法度では明確な規定を持たない櫓・塀・門など城郭の作事部分の修築について、寛永十二年の法度では、「如先規可修補事」と修築に関する限り、幕府の許可がなくとも修築することを認めている点である。慶長二十年の法度と寛永十二年の法度の変化・相違点についての評価は、この時期の具体的な事例を検討したうえで行うこととして、それ以降の武家諸法度の規定をみておこう。

四代將軍徳川家綱が寛文三年（1663）五月に出した武家諸法度⁴⁾は、寛文十二年の武家諸法度と同文であり、変化は見られない。ついで、五代將軍綱吉によって天和三年（1683）七月に出された武家諸法度では、前条に「人馬兵具等、分限ニ応じ可相嗜事」の一条が入ったために、城郭普請についての規定は第四条となるが、その条文は、

一新規之城郭構営堅（禁脱カ）止之、居城之隍壘石壁等敗壞之時は、達奉行所、可受差図也、櫓塀門以下は如先規可修補事、

であり⁵⁾、寛永十二年の法度で「可受其旨也」となっていたところが、「可受差図也」となったほかは、語句のわずかな相違を除き変わるところはない。「可受差図也」についても、「奉行所」＝老中の指図を受けることが明確になっただけで、その意味するところに大差はない。

六代將軍家宣が宝永七年（1707）四月に出した武家諸法度は、よく知られているようにそれまでの武家諸法度と文体が大きく変わっている⁶⁾。

一新築の城郭私に経営する事を聴さず、其修築に至ては、堀土居石垣等は上裁を仰くへし、矢倉門塀等ハ制限にあらざる事、

付、道駅橋渡人馬等ハ言ふニ及はす、私之関所、津留等、往來の煩をなす事を聴さず、
荷船之外、五百斛以上之大船を造るへからさる事、

宝永七年の法度では、この城郭に関する箇条は第五条に置かれているが、これまでの内容の外に、天和三年の法度では第五条にあった関所・津留などの箇条と、第一三条にあった荷船以外の五百石以上の大船禁止の箇条とが、この条の「付」として付されており、見た目には大きく変化したかに見える。また、城戸久氏は、「矢倉門堀等ハ制限にあらさる事」の部分について、寛永十二年の法度の規定と比して「甚だしい緩和」がなされたと評価を下しておられるが、両者を比較するかぎり修辞上の相違を除けば、両者にはそれほど大きな差異はないというのが、私見である。なお、「上裁を仰くへし」とある場合の「上裁」の主体としては將軍と老中の可能性があるが、正徳六年（1716）の伊予大洲城の石垣普請許可は老中の裁下によって出されている⁷⁾ことから、この「上裁」の主体は老中である。

享保二年（1717）三月の吉宗以降の武家諸法度⁸⁾は、いずれも天和三年の法度を踏襲しており、大名城郭についての箇条に変化はない。

このように武家諸法度の条文を見るかぎり、江戸幕府の大名の居城に対する政策の画期は、慶長二十年と寛永十二年とにあるとってよいであろう。次章以下では、この点を念頭に置きながら、具体的事例に即して、江戸幕府の大名城郭政策の変遷と特質を検討する。

- 1) 『御触書寛保集成』1号。なお『徳川禁令考』前集154号には「大乱之本也」とある。
- 2) 『御触書寛保集成』3号。
- 3) 『御触書寛保集成』4号。『徳川禁令考』前集157号には「新規之城郭」となっている。
- 4) 『御触書寛保集成』5号。
- 5) 『御触書寛保集成』6号。『徳川禁令考』前集160号には「禁止之」となっており、「敗壞之時」とあるところが「破壊之時」となっている。
- 6) 『御触書寛保集成』7号。
- 7) 正徳六年三月二十九日付江戸幕府老中連署奉書（「北藤録」15、東京大学史料編纂所写本）に「伊予国大洲城（中略）石垣孕候付而築直之事、絵図朱引之通得其意候」とある。
- 8) 『御触書寛保集成』8号。

Ⅱ 慶長期における城郭普請

慶長期における大名城郭普請の様子とそれへの徳川政権の対応については、高柳光寿氏や城戸久氏が、すでに大略明らかにされているが、ここでは、これらの成果を踏まえつつ、慶長期の大名城郭をめぐる状況について述べることにしたい。

『慶長見聞録案紙』慶長十四年（1609）一月二十日の条には、

内府様（徳川家康）吉良より岡崎へ御着、中国西国之大名衆、於所々城普請丈夫に構之旨、
於岡崎内府様御聞被成、不可然之仰有之、

とあり¹⁾、また『当代記』の慶長十四年一月の条にも、

中国西国大名、所々城々普請丈夫相構由、於岡崎令聞給、内々不可然由曰、
とあり、中国・西国の大名たちが盛んに城郭の普請を行っており、これを家康がこころよしとせず、普請を禁じたことが知られる。このとき普請を禁じられた大名が誰であったのかは、この二つの史料とも明らかにしないが、次にあげる福島正則の書状²⁾はその事的一端を示すものであろう。

尚以、於御上洛者、銀子余仁にて無御調様に、随分御馳走可申候、可被成其御心得候、
已上、

駿河へ被遣候御使者、従本多上野殿（正純）之状を御言伝りにて、是迄御立寄候て一書申入候、随て先日者御懇之預御使札、殊色々珍敷者共被懸御意忝存候、就其、琉球之儀御存分之儘に被仰付候段、御手柄共、我等式迄大慶存候、次拙者儀、輝元（毛利）代より之在城共、此以前一二ヶ所普請申付候处、新城迄拵申由、御所様（徳川家康）御耳に悪敷罷立、当春より御所然々共無御座に付而、公儀を憚、何方へも書状之取替しをも不仕候故、乍存以使札も不申入、無音之様に罷過候、右之城破却仕、御理申上候处、御所様被成御聞届、如前々普請可仕旨被成御錠に付て、播外聞申候、右之御札為可申上、去十一日に致出船、備前之内牛窓迄罷登候处、今程駿河へ致伺公儀、当秋迄可被相延旨、本上州より被仰越付而、自彼地帰国仕候、彼是手前取紛、弥無音に罷成候、将又承候へハ、琉球之王を被成御同道、近日御上之由承候、其刻ハ我等も罷上候条、於上方懸御目万可得貴意候、次最前被仰下候銀子之儀、安き御事に御座候、則大坂御宿道與へ可被申談旨、林猪兵衛方へ申遣候間、可御心安候、恐惶謹言、

（朱書）「慶十四」

七月廿九日

羽柴左衛門大夫

正則判

羽柴陸奥守様（島津家久）人々御中

この書状のなかで、城普請に係わる点のみについて意を取れば、正則は、毛利輝元の時代からの城を一二ヶ所普請したところ、新城を拵えたというふうに家康の耳に入り、この春より家康との関係がうまくなく、以降公儀を憚り、どことも書状を取り交わしておらずにすごしていたが、この城を破却し、その旨を断ったところ、家康も聞き届けて、以前のごとく普請するように命があり、ようやく落着し、その御札に行こうと備前の牛窓まででかけたが、本多正純からこの秋まで駿河への伺公を延期するようにとの指示があったと報じている。すなわち、家康は、法度としてではなく、福島正則に対し個別的に意にそわないことを伝えることによって大名福島氏の居城普請を牽制したのである。

ではこれ以前の状況はどのようなであったろうか。『当代記』慶長十二年八月の条には、

此二三箇年中、九州中国四国衆、何モ城普請専也、乱世不遠分別歟と云々、とあり、また「鍋島直茂公譜補」にも、

一慶長十四年己酉、天守御成就、今年日本国中ノ天守数二十五立ツ、とあり³⁾、諸大名が盛んに城普請に励んでいたことが窺える。

では、これらの城郭普請は家康の許可のもとに行われていたのであろうか。慶長九年、毛利輝元は、関ヶ原の合戦後長門・周防へ所領が削減されたのにもない、新たな城地の選定にかかるが、この選定にあたり、家康に三田尻と山口と萩の三か所を呈示し、家康の意向に従って城地を萩に決定しており⁴⁾、徳川政権の大名城郭への統制があったことは確である。しかし、この毛利氏の場合は関ヶ原の合戦での敗者という立場にあり、状況はかなり特異な側面をもっている。

家康がまだ将軍になる以前であるが、豊前小倉を領した細川忠興は、慶長七年に小倉城の普請を開始するが、息子の細川忠利への慶長七年三月二十三日付の書状⁵⁾には「我々居城小倉相替候、はや御暇出候間、近日下国之覚悟ニ候、普請大方申付候ハ、七月末、八月始頃ニ大納言（徳川秀忠）様為御見舞可罷下候事」とあり、また八月八日付の忠利宛の忠興書状⁶⁾に「小倉普請過半相済候、十月・十一月之比可移候」とあるなど、この期の忠興の書状からは、徳川氏に城郭普請の許可を求めた形跡は見られない。また、慶長十三年に開始された肥前国佐賀城の改造にあっても、鍋島氏の側から徳川氏に許可を求めた様子はない⁷⁾。さらに、先にあげた島津家久宛の福島正則の書状から、城の修築普請については徳川氏の意向を何う必要はないと正則が考えていたと見てよく、この時点ではなお大名城郭の普請を徳川政権が十分に制御するまでに至っていないと見なしえるであろう。

しかし、慶長十四年に家康が見せた大名城郭普請への対応は、その後により事例を得ることはできないが、この後の大名城郭普請に大きな規定性を与えたはずである。

- 1) 『大日本史料』12—6、慶長十四年一月二十日の条。
- 2) 「薩藩旧記」(『大日本史料』12—6、慶長十四年七月二十九日の条)。
- 3) 『大日本史料』12—5、慶長十三年是歳の条。
- 4) 『大日本史料』12—1、慶長九年三月三日の条。『大日本古文書』毛利家文書、499号。
- 5) 『大日本近世史料—細川家史料』1—16号。
- 6) 『大日本近世史料—細川家史料』1—20号。
- 7) 『大日本史料』12—5、慶長十三年是歳の条。

Ⅲ 元和・寛永前期の城郭普請許可

1 法度への大名の対応

ここでは一国一城令と慶長二十年(1615)の武家諸法度が出て以降、寛永十二年(1635)の

武家諸法度の改訂までの二〇年あまりの大名城郭に対する幕府の政策と、それへの大名の対応とを明らかにする。

慶長二十年の武家諸法度によって新規の城郭の建設は禁止され、居城の修補については將軍へ許可を求めることが定められた。元和四年（1618）閏三月二日、細川忠興は江戸にいた細川忠利に宛てて、

一中津にて松田若狭居申丸川手之石垣十四五間崩申候、其仮置候者、梅雨ニ又むけ可申候、左候ハ角の矢倉まで崩候事候間、土大炊殿（土井利勝）相談候て、如前石垣つき候様ニ被才覚、様子可被申越候、

と¹⁾、中津城石垣修築の許可を土井利勝に求めるよう指示している。さらに、同年四月一日付の細川忠利に宛てた細川忠興の書状²⁾には、

尚々普請之事之状をば、一日跡ニ大炊殿へ直ニ可被渡候、以上、

追而申候、其元は如何候哉、此辺年明候てから大雨ふりつゝき、出水候而、当城（小倉城）も中津も土居・石垣・屏・ため池之石垣以下、事之外損申候間、前のことく仕度候、不及申少茂新儀之事在之間敷候条、此由其方直ニ大炊殿（土井利勝）へ被得御意、此返事ニ事済候様ニ可被申候、其子細者、いづれも人之妻子を置候うらにて候間、一時もたゞハ不被置候、ため池之石堤などハ尚以はやく不申付候へハ、ため池悉ぬけ申、過分ニ手間入ニ候間、能々可被申候、尚口上ニ申候、恐々謹言、

卯月朔日（元和四年）

越

忠興（細川）

内記殿（細川忠利）

進之候

とあり、正月以来の雨で、小倉城・中津城とも、土居・石垣・屏・溜め池の石垣がひどく破損し、早急に修復の必要がでてきたので、土井利勝の修復普請の許可を求めるよう指示している。そして同年六月二十六日付の細川忠利宛の忠興の書状³⁾には、

一当城・中津普請之儀大炊殿（土井利勝）被得御意、則自御奉行衆普請可仕旨御折紙到来候間、則只今返事申、大炊殿迄遣候、大炊殿江不始于今儀満足仕旨、能々可被申入事、とあることから、土井利勝が小倉・中津両城の修復普請についての「御意」すなわち將軍秀忠の許可を得、それを伝える年寄衆からの「御折紙」が忠興のもとに到来したことが分かり、細川氏は、慶長二十年の武家諸法度の城郭規定を遵守していたことが確認できる。

いっぽう元和五年六月、広島城主福島正則が居城石垣の無断修復の罪によって改易に処せられたことは、周知の事実である。しかし、正則が改易されるまでには、それに至る過程があった。京都所司代であった板倉勝重に宛てられた元和五年四月二十四日付の江戸幕府年寄連署奉書⁴⁾には「福島左衛門大夫殿（正則）居城、不被得御意被致普請候儀、御耳立申候処、不屈之

由被仰出、則彼居城被致破却、御前相済申候」とあり、また土井利勝と島田利正とが本多忠政に送った同日付の書状⁵⁾にも、

福島左衛門大夫（正則）方、ひろ島の城にて普請被仕候儀、被聞召候而、御気色悪御座候、然共左太被申上様ニハ、普請仕候城にてわらせられ、如何様ニも被仰付次第と御詫言被申上候、大形左様之筋ニも可相済候間、御気遣被成間敷候、

とあり、さらに、正則に改易を伝えた元和五年六月二日付の江戸幕府年寄連署奉書⁶⁾には、

今度広島普請事、被相背御法度之段、曲事被思召候処、彼城可有破却之旨依有訴訟、残置本丸、其他悉可破捨之由被仰出候、然共上石計取除、其上以無人被送日数之儀、重畳不屈仕合思召候、此上者被召上両国、為替地被下津軽通（由カ）、被仰出候也、

とある。これら三つの奉書・書状から、正則改易に至る幕府と正則との折衝を再構成すれば、まず正則が將軍秀忠の許可をえないで居城の普請をしたことが、秀忠の耳に入り、秀忠の機嫌を損じたのに対し、正則から普請した城は破却し、どのような仰せでも従う旨の詫言がなされ、それに対し秀忠は、本丸のみを残しことごとく破却すぐよう正則に命じた。しかし、正則は、上石ばかりを取り除いただけで、その後はそのままにして日を送った。これを見て、秀忠は、重ね重ね不屈きであると正則を改易に処した。この経過をみれば、たとえ背後に秀忠のいかなる計略があったとしても、秀忠は、正則の詫言を入れ、いったんは許しており、また普請の程度がどのようなものであったかは明らかではないが、慶長十四年にも城郭を普請し家康の不興を買ったことのある正則が、自ら行った普請が改易に相当するほどのことと認識していれば、こうした行動はそもそも取らなかったと思われ、この段階では、幕府の側にも法度違反、則改易という対処の形式はできあがっておらず、また大名のなかには正則同様、あらゆる居城普請の許可を幕府に求めることの必要性を十分には認識していないものがいたと思われる。しかし、福島正則の改易は、改易の奉書に「被相背御法度之段」と武家諸法度の城郭修補の項に違反したことが明示されたことで、この後大名たちに城郭修築の許可を徳川氏に求めることを強いるおおきな強制力となったと考えられる。

2 普請許可の主体と対象

では、將軍の大名居城普請許可はどのような形式で、大名に伝えられたであろうか。先にあげた元和四年の小倉・中津両城の修築普請の許可は「奉行衆」よりの「御折紙」によって細川氏に伝えられていることが判明するが、この「御折紙」は細川家の史料には残されていない。表は、城郭普請の許可を伝える「奉行衆」よりの「御折紙」＝年寄（老中）連署奉書の一覧である。表に示した許可対象の項からも知られるように、許可の対象は、石垣等の修築普請だけでなく、新規の普請・作事など多様である。そこで、以下許可の対象に注目して具体的事例を検討していくことにする。次にあげた姫路城主本多忠政に宛てられた元和四年五月十五日付の

大名城郭普請許可制について（藤井）

奉書⁷⁾が、管見の限りでの城郭普請を許可した最初の奉書である。

以上、

姫路之御城、男山之方石垣御上候而、多門作被成度之由承候、右之段申上候処ニ、尤ニ被思食候間、其御心得可被成候、恐々謹言、

午（元和四年）
五月十五日

安藤対馬守（重信）
書判
土井大炊助（利勝）
書判
本多上野介（正純）
書判
酒井雅楽頭（忠世）
書判

本多美濃守殿（忠政）
人々御中

この奉書は本多忠政に対し、姫路城の男山の石垣を築き上げて多門を作ることを許可したものであるが、この普請は単なる修築ではなく、新規の普請である。また「尤ニ被思食候」とあるように、将軍秀忠の意思として許可されている。

次にあげる奉書⁸⁾は、伊予大洲城主加藤貞泰に宛てられたものである。

以上、

一筆申入候、仍貴殿御居城長屋并堀破損仕候ニ付而、御作事有度之由被仰越候、則其趣得上意候処、右破損之所修理可仕旨御淀ニ候条、可被成其御心得候、恐々謹言、

元和六
三月廿一日

安藤対馬守
重信判
土井大炊助
利勝判
本多上野介
正純判
酒井雅楽頭
忠世判

加藤左近大夫殿（貞泰）

この奉書は、大洲城の破損した長屋と堀の修理を許可したもので、石垣などいわゆる普請でなく作事の許可であり、この場合も「御淀」とあるように許可の主体は、将軍秀忠であった。

於信州植田居城普請之儀、絵図之通得上意候処、心之俣普請可仕旨被仰付、可被得其意候、恐々謹言、

寛永三丙寅

永井信濃守

大名城郭普請許可の老中連署奉書

No.	年 月 日	城郭名	宛 名	書き出し	普 請 対 象	許可文言	脇付年号	原写	出 典
1	(元和4)5.15	姫路城	本多忠政	姫路之御城	新規石垣・多門作	思食	午	写	譜牒餘録
2	元和6.3.21	大洲城	加藤貞泰	一筆中入候	長屋・堀修築	御錠	元和六	写	北藤録
3	(元和6)8.6	広島城	浅野長晟	去五月之洪水	石垣・櫓堀修築	上意	申	写	江戸幕府朱黒印内書留
4	元和9.4.10	小倉城	細川忠利	小倉之城	石垣修理・新規屋敷	御錠	元和九	原	部分御旧記
5	寛永1.9.12	赤楯城	丹羽長重	赤楯之城	修築普請	思召	寛永元	写	譜牒餘録
6	寛永2.10.6	小倉城	細川忠利	先度之風雨	普請築直	上意	寛永二	写	部分御旧記
7	寛永2.11.10	人吉城	相良長每	其方居城破損	破損修復	上聞	寛永二	原	相良家文書
8	寛永3.4.16	植田城	仙石忠政	於信州植田城	新城普請	上意	寛永三丙寅	写	改撰仙石家譜
9	寛永4.2.23	仙台屋敷	伊達政宗	就仙台屋敷	新規屋敷構普請	上覧	寛永四	原	伊達家文書
10	寛永4.6.6	白川侍町	丹羽長重	白川侍町狭	堀・屋敷新規普請	上意	寛永四	写	譜牒餘録
11	寛永4.8.22	小倉城	細川忠利	小倉北之海手	水道修復	御錠	寛永四	写	部分御旧記
12	寛永5.8.11	白川城	丹羽長重	白川之城普請	普請	上意	寛永五辰	写	譜牒餘録
13	寛永7.1.14	小倉城	細川忠利	小倉之城海辺	破損修復	上聞	寛永七午	写	部分御旧記
14	寛永7.7.9	須本	蜂須賀忠英	淡州須本	新城普請	御意	寛永七午	原	蜂須賀家文書
15	寛永8.6.6	金沢城	前田利常	今度御居城	新規作事・堀普請	上意	寛永八年未	写	国初遺文
16	寛永8.11.9	小倉城	細川忠利	小倉之城海辺	石垣修復	御意	寛永八未	写	部分御旧記
17	寛永10.6.7	勝竜寺城	永井直清	勝竜寺本丸	現状変更	思召	寛永十酉	原	永井家文書
18	寛永10.7.8	勝竜寺城	永井直清	一筆令中候	新規屋敷取	上聞	寛永十酉	原	永井家文書
19	寛永11.4.14	熊本城	細川忠利	熊本之城櫓	櫓堀石垣修復・新規石垣	上聞	寛永十一戌	写	部分御旧記
20	寛永11.8.2	熊本城	細川忠利	熊本之城	新規普請	御直	寛永十一戌	写	部分御旧記
21	寛永11.8.12	小浜城	酒井忠勝	若狭小浜之城	石垣堀櫓門修復	御高覧	寛永十一戌	原	酒井家文書
22	寛永12.2.11	小浜城	酒井忠勝	小浜之城殿主	新規殿主石垣・石垣修復	聞召	寛永十二亥	原	酒井家文書
23	寛永12.8.23	白川城	丹羽長重	白川之城本丸	石垣築直	其意	寛永十二亥	写	譜牒餘録
24	寛永13.2.14	高知城	山内忠義	高知城石垣	石垣天守櫓門等修復	上聞・其意	寛永十三子	写	山内家史料
25	寛永13.3.14	国府城	島津家久	大隅之国之内	新規屋敷	上聞	寛永十三子	写	後編薩藩旧記雑録
26	寛永15.6.15	小浜城	酒井忠勝	小浜城三之丸	郭外新規石垣普請	其意	寛永十五寅	写	酒井家文書
27	(寛永16)7.13	鶴岡城	酒井忠勝	鶴岡城本丸	堀拡張	上聞	卯	写	大泉紀年
28	寛永17.6.14	熊本城	細川忠利	従熊本之城	小川拡張	承届	寛永十七庚辰	写	細川家譜
29	寛永17.9.3	熊本城	細川忠利	熊本城本丸	石垣修復	其意	寛永十七辰	原	細川家文書
30	寛永17.9.3	八代城	細川忠興	八代城本丸	石垣築直	其意	寛永十七辰	写	部分御旧記
31	寛永18.7.4	上田城	仙石政俊	上田城本丸	石垣築直・土手修復	其意	寛永十八巳	写	改撰仙石家譜

32	寛永19. 8. 26	小浜城	酒井忠勝	小浜城百間橋	石垣新規・石垣築直	上聞・其意	寛永十九年	原	酒井家文書
33	寛永21. 6. 23	大村城	大村純信	大村城本丸	新規屋敷	上聞	寛永廿一年申	写	大村家覚書
34	寛永21. 8. 23	熊本城	細川光尚	熊本之城今度	石垣新規・石垣槽塀修復	上聞	寛永廿一中	写	部分御旧記
35	正保2. 5. 23	小浜城	酒井忠勝	寛 若州小浜	石垣新規・石垣修復	上聞	正保二酉	写	酒井家文書
36	正保4. 5. 19	仙台城	伊達忠宗	仙台城大手	石垣修復・櫓等修補	其意	正保四亥	写	伊達家文書
37	慶安1. 6. 17	高知城	山内忠義	高知之城	新規屋敷・堤築足	上聞	慶安元子	写	山内家史料
38	慶安2. 6. 4	二本松城	丹羽光重	二本松城山内	新規普請	上聴	慶安二丑	写	譜牒餘録
39	慶安2. 8. 14	熊本城	細川光尚	隅本城本丸	石垣修復	其意	慶安二丑	原	細川家文書
40	慶安2. 9. 26	福山城	水野勝俊	福山城本丸	石垣修復	其意	慶安二丑	原	水野家文書
41	慶安3. 10. 3	金沢城	前田綱紀	金沢城今度	石垣修築・堀浚	其意	慶安三寅	写	国初遺文
42	慶安4. 9. 18	二本松城	丹羽光重	御状令被見	普請	——	慶安四卯	写	譜牒餘録
43	慶安4. 9. 25	高槻城	永井直清	高槻城本丸	石垣等・櫓門修築	其意	慶安四卯	原	永井家文書
44	承応2. 11. 12	小浜城	酒井忠勝	小浜城惣構	堀浚	其意	承応二巳	原	酒井家文書
45	承応3. 4. 19	臼杵城	稲葉信通	臼杵城二丸	石垣・櫓修築	其意	承応二午	原	稲葉家譜
46	明暦2. 8. 晦	二本松城	丹羽光重	二本松城	石垣築直	其意	明暦二申	写	譜牒餘録
47	明暦4. 3. 23	岸和田城	岡部宣勝	岸和田二丸	石垣新規	台聞	明暦四戌	写	御奉書并諸侯方書状写
48	万治1. 11. 25	大洲城	加藤泰興	大洲之城	石垣修築	其意	万治元戌	写	北藤録
49	万治2. 8. 19	福井城	松平光通	福居城当四月	門・石垣修築	其意	万治二亥	写	家譜
50	寛文2. 6. 18	小浜城	酒井忠直	小浜城今度	石垣修補	其意	寛文二寅	原	酒井家文書
51	寛文2. 6. 22	高槻城	永井直清	高槻城先頃	石垣築直	其意	寛文二寅	原	永井家文書
52	寛文4. 7. 18	大洲城	加藤泰興	大洲城三之丸	石垣築直	其意	寛文四辰	写	北藤録
53	寛文5. 5. 18	大洲城	加藤泰興	大洲城本丸	石垣築直	其意	寛文五巳	写	北藤録
54	寛文6. 3. 18	小浜城	酒井忠直	小浜城本丸	石垣築直	其意	寛文六午	原	酒井家文書
55	寛文8. 6. 19	大洲城	加藤泰興	大洲城二丸	石垣新規・築直	上聞・其意	寛文八申	写	北藤録
56	寛文9. 8. 14	福井城	松平光通	福井城去頃	櫓二階門升形石垣	上聞	寛文九酉	写	家譜
57	寛文12閏6. 6	竜野城	脇坂安政	播州竜野	城地取立	被仰出	寛文十二子	写	脇坂文書
58	延宝2. 10. 23	二本松城	丹羽光重	二本松城本丸	石垣築直	其意	延宝二寅	写	譜牒餘録
59	延宝4. 4. 25	臼杵城	稲葉景通	臼杵城北方海	郭外新規屋敷出	其意	延宝四辰	写	稲葉家譜
60	延宝4. 7. 13	福山城	水野勝種	福山城惣構	石垣新規・石垣・櫓築直	上聞・其意	延宝四辰	原	水野家文書
61	延宝4. 12. 11	熊本城	細川綱利	熊本城坤方	石垣土手築直	其意	延宝四辰	写	部分御旧記
62	天和3. 8. 3	田中城	土屋政直	駿州田中城	土手築直・堀浚	承届	天和三亥	原	土屋家文書
63	元禄14. 9. 15	大洲城	加藤泰恒	伊予国大洲城	櫓建直・石垣築直・堀浚	其意	元禄十四巳	写	北藤録

四月十六日

尚政

井上主計頭

正就

酒井讃岐守

忠勝

土井大炊頭

利勝

酒井雅楽頭

忠世

仙石兵部大輔殿（忠政）

この奉書⁹⁾は、仙石忠政による信濃上田城の新規普請の許可をしたものである。なお、元和十年から寛永九年までの秀忠大御所時代の「上意」については別稿で明らかにしたように大御所秀忠と將軍家光の両者の意志として本丸西丸九年寄連署奉書によって示されており、この場合の「上意」の主体も秀忠と家光の両者である。寛永七年の蜂須賀忠英に対する淡路須本普請もこの例に属するものである。

以上、

白川侍町狭二付而、城際之青熊川を堀除、屋敷ニ被仕度之旨、以絵図被仰上候、則遂披露候処、早々可申付旨上意候、恐々謹言、

寛永四

六月六日

永井信濃守

尚政判

井上主計頭

正就判

酒井讃岐守

忠勝判

土井大炊頭

利勝判

酒井雅楽頭

忠世判

丹羽五郎左衛門殿（長重）

この奉書¹⁰⁾では、城郭そのものでなく、城周りの現状変更と侍町建設を許可したものであり、この場合も「上意」を伺ったうえでの許可である。次の例¹¹⁾は、城郭周辺の修築の許可である。

以上、

小倉北之海手町裏石垣之水道三ヶ所、同西ため池の水はき出令破損ニ付、如前々修復有度之旨、以書付被仰上候、達上聞候処、早々可被申付之由御詮候間、可有其御心得候、恐々謹言、

大名城郭普請許可制について（藤井）

寛永四

八月廿二日

永井信濃守（尚政）判

井上主計頭（正就）同

酒井讃岐守（忠勝）同

土井大炊頭（利勝）同

酒井雅楽頭（忠世）同

細川越中守殿（忠利）

人々御中

このように元和・寛永前期，大名城郭について幕府が許可の対象としたものは，武家諸法度に規定された石垣や櫓・塀・門などの修補だけではなく，新規の普請や作事，さらに城郭につながる地域や新たな城郭機能の導入・変更にまでおよんでいることが知りえる。

つぎにこうした大名城郭普請の許可制がどのように定式化あるいは定着していくのかを，普請許可の奉書の形式と内容に注目しながら見ていこう。

寛永十二年に老中月番制度ができて以降は，大名からの居城修築普請許可願は，月番老中に提出されるようになるが¹²⁾，先に触れた元和四年の小倉・中津城の普請の場合には，細川忠利は，修築願を幕府年寄の一人土井利勝に依頼している。また次の例は元和六年の広島浅野氏の例である。

去五月之洪水ニ，御居城二丸之角櫓・石垣供崩，二三丸并惣構之屏破損之所多御座候之由，板倉伊賀守（勝重）方迄被仰越候趣達高聞候処，如前々可被申付之旨，上意候間，可被得其意候，

申（元和六年）

八月六日

安対（安藤重信）

土大（土井利勝）

本上（本多正純）

酒雅（酒井忠世）

浅野但馬守殿（長晟）

この奉書¹³⁾は福島正則の後を受けて広島城の城主となった浅野長晟に対して居城の破損石垣と塀の修築を許可したものであるが，この場合には「板倉伊賀守（勝重）方迄被仰越候」とあるように，修築願をまず京都所司代の板倉勝重に出している。さらに，別稿¹⁴⁾で明らかにしたように寛永七年，蜂須賀氏が淡路須本の普請を願ったときには，西丸筆頭年寄の土井利勝・本丸筆頭年寄の酒井忠世・本丸年寄の酒井忠勝の三人に願書を提出している。このようにこの時期には幕府への城郭修築許可の申請ルートはいまだ十分には定まっていない。

以上，

小倉之城土居石垣屏破損ニ付，修理之儀并葭原迄埋屋敷ニ被仰付度之由候，絵図之通達上

聞候処、可被申付之旨御錠候間、可被為得其意候、恐々謹言、

元和九

四月十日

土井大炊頭（利勝）

名乗判

酒井雅楽頭（忠世）

名乗判

細川越中守殿（忠利）

この奉書¹⁵⁾は細川忠利に普請を許可したものであるが、この奉書での特徴は普請許可申請にあたって「絵図」が提出されたことが明記されている点である。これ以降大半の奉書には、この絵図の記載があり、普請許可願提出に際し絵図を必要とするようになったことが分かったとすると、普請を許可する奉書の形式が整っていく様子が窺える。

さらに、奉書の書き出し文言について見ると、表に示したように、寛永十年代以降の奉書の書き出しには、対象となる城郭名が明記されているのに対し、元和四年五月十五日付の奉書では「姫路之御城」と寛永十年代以降の書き出しとはほぼ同形式であるものの、元和六年三月二十一日付の奉書では「一筆申入候、仍貴殿御居城」とあり、また元和六年八月六日付の奉書でも「去五月之洪水ニ御居城」とあり、対象とする城郭の名さえ記しておらず、その形式は一定していない。この傾向は、寛永十年までは続くともてよいであろう。

脇付年号についても、元和六年五月十五日付の奉書と元和六年八月六日付の奉書は、十二支のみが記されているのに対し、元和六年三月二十一日付の奉書、元和九年四月十日から寛永四年八月二十二日付の奉書までは元号とその年数が、寛永五年以降の奉書は原則として元号と年数と十二支とが書かれており、脇付年号の書き方の形式が整うのが寛永五年前後のことであったことが明らかとなる。

このように、普請許可申請にあたって絵図が必要書類とされるようになり、普請を許可する奉書の書き出しや脇付年号の形式が整うようになるのは、はやくて寛永五年前後のことであり、申請ルートの未確定と合わせ考えるとき、元和・寛永前期は、大名城郭の普請許可制が整備されていく段階にあったといえよう。

1) 『大日本近世史料—細川家史料』 1—153号。

2) 『大日本近世史料—細川家史料』 1—157号。

3) 『大日本近世史料—細川家史料』 1—163号。

4) 『譜牒餘録』上、935頁。なお、『大日本史料』12—30では「四月廿七日」としている。

5) 『譜牒餘録』上、946頁。

6) 「江戸幕府朱黒印内書留」1（京都大学文学部博物館蔵）。『大日本史料』12—48、6頁。「江戸幕府朱黒印内書留」は、この奉書を六月九日のものとしているが、「向山誠斎庚戌雜綴」所収の奉書は「六月二日」となっている。

7) 『譜牒餘録』上、935頁。

8) 「北藤録」13（『大日本史料』12—33、520頁）。

- 9) 「改撰仙石家譜」（『信濃史料』24, 367頁）。この城が新規のものであったことは仙石忠政宛の寛永三年二月六日付の江戸幕府本丸西丸九年寄連署奉書（「仙石家譜」）に「其方儀居城取立候時、当年御上洛之御供被致御救免候間、可被得其意候」とあることから確認できる。
- 10) 『譜牒餘録』中、197頁。
- 11) 「部分御旧記」城郭之部（「細川家文書」）。
- 12) 寛永十三年七月十九日付細川光尚披露状（「部分御旧記」, 『熊本県史料』近世篇1, 518頁）に「熊本御普請之儀被仰下、其上御一ツ書を被下、讃岐殿（酒井忠勝）へ可申入由奉得其意候、乍去此儀又左（曾我又左衛門古祐）も御存ニ而候付、談合仕被下候、御覚書を受、一ツ書を讃州まで絵図・御奉書為持三右衛門・助進遣候へハ、被仰上通御念一段尤候、御月番にて候間、豊後殿（阿部忠秋）へ先可申入旨被仰候付、豊後殿へ絵図・一ツ書・御奉書遣候処」とあり、月番老中が受け取ることが原則となったことが分かる。
- 13) 「江戸幕府朱黒印内書留」1。
- 14) 「秀忠大御所時代の「上意」と年寄制」（岸俊男教授退官記念会編『日本政治社会史研究』下、塙書房、1985年）。
- 15) 「部分御旧記」城郭之部（「細川家文書」）。

Ⅳ 武家諸法度改訂以降の城郭普請許可

寛永十二年（1635）六月に改訂された武家諸法度においては、新規の城郭の禁止と、居城の堀・土壘・石垣が敗壊したときには「奉行所」に達し、その指示を受けることが命じられ、櫓・堀・門についてはこれまでのように修築することが規定されている。元和・寛永前期を通じて幕府が採ってきた大名城郭についての政策とこの規定とでは、第一の新規城郭の禁止という点では変わらないが、城郭修築にあたっての許可主体と作事部分の修築の取扱いについては大きく変化した。すなわちこの規定では、届け出先が明確に「奉行所」＝老中とされ、かつその許可は老中から出されることになり、さらに第三の櫓・堀・門などの作事部分の修復については許可の対象から外された。ただ、この法度では新規の普請・作事については、なんら規定されていない。そこで、武家諸法度が改訂された寛永十二年六月以降の大名城郭普請の許可の様子を具体的に見ていこう。次にあげたのは、武家諸法度改訂直後の寛永十二年八月二十三日付で丹羽長重に白川城の石垣の築き直しを許可した老中連署奉書¹⁾である。

以上、

白川之城本丸門脇升形之石垣片方弱候之間、被築直度之由、目録之通具得其意候、可有御普請候、恐々謹言、

寛永十二亥
八月廿三日

堀田加賀守
正盛判
阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守
信綱判

酒井讃岐守
忠勝判

土井大炊頭
利勝判

丹羽五郎左衛門殿（長重）
人々御中

この奉書での普請許可の対象は、崩れかけた升形の石垣であり、許可の主体は、「上意」ではなく「得其意」とあるように老中であった。すなわち寛永十二年改訂の規定が守られていることが確認できる。ところが、次にあげる寛永十三年の高知城の例²⁾は寛永十二年の改訂に添ったものとはなっていない。

高知城石垣崩候所被築立度由、書面之通達上聞候之处、可申付之旨被仰出候、将又天守并櫓門多門以下破損之所所修復被有之度之由、絵図之通得其意候、是又如元可有御普請候、恐恐謹言、

寛永十三子
二月十四日

阿部豊後守忠秋
松平伊豆守信綱
酒井讃岐守忠勝
土井大炊頭利勝

松平土佐守殿（山内忠義）

すなわち、ここでは崩壊した石垣の修復を許可している主体は「達上聞」とあるように将軍家光であり、また寛永十二年の規定では許可の対象から外されていた作事部分の修築に付いては「得其意」とあるように老中が許可の主体となっている。こうした例は、この後、残された事例の限りでは見えず、おそらくは、規定適用に当たって混乱したためと思われる。

次にあげる二つの奉書はいずれも若狭小浜城の例であり、ともに新規普請と修築普請を同時に許可したものであるが、前者³⁾は寛永十二年の武家諸法度改訂のまえ、後者⁴⁾は後のものである。

以上、

小浜之城殿主相立候事、西丸北南西三方之石垣壱間上之築直候事、所々破損修復事、以絵図被申上候、右之趣被聞召、以連々心之低可申付之旨被仰出候、可被得其意候、恐々謹言、

寛永十二亥
二月十一日

阿部豊後守
忠秋（花押）
松平伊豆守
信綱（花押）

大名城郭普請許可制について（藤井）

土井大炊頭
利勝（花押）

酒井讃岐守殿（忠勝）

以上、

小浜城百間橋之虎口升形石垣新規築之建門事、同所門脇北南之石垣新規築之事達上聞候之處、可申付之旨上意候、次西方侍屋敷之後川辺石垣築直之事、同所櫓台之石垣二ヶ所築直之立櫓事、絵図之通得其意候、以連々如元可有普請候、恐々謹言、

寛永十九年
八月廿六日

阿部豊後守
忠秋（花押）
阿部対馬守
重次（花押）
松平伊豆守
信綱（花押）

酒井讃岐守殿（忠勝）

前者は、天守の築き立てと、そのための新規の石垣の普請、その他所々の破損石垣の修築を許可したものであるが、「被聞召」とあるようにいずれも將軍家光が許可主体である。それに対し後者では、新規の石垣については「達上聞」とあるように將軍家光が許可主体であるが、修築の石垣については「得其意」とあるように許可主体は老中であり、新規と修築とでは明確に許可の主体が分かたれている。

大隅之国内国府之城追手裏口仁建門城内ニ作番小屋少々番之者計差置、山下仁構屋敷薩摩守（島津光久）罷有之様仁被仕度之由、被差上絵図候、右之趣達上聞候之處、可被申来之旨被仰出候、可被得其意候、恐々謹言、

寛永十三子
三月十四日

堀田加賀守
正盛
阿部豊後守
忠秋
酒井讃岐守
忠勝
土井大炊頭
利勝

薩摩

中納言殿（島津家久）人々御中

この奉書⁵⁾は島津家久に対し、国府城の建門と城内の番小屋の建設、山下に島津光久の住まう屋敷の建設とを許可したものであり、その許可は「達上聞」とあるように將軍家光によってなされている。すなわち門・小屋といった作事についても新規のものは將軍の許可が必要であ

り、また城郭につながる屋敷建設など現状を変更する場合にも將軍の許可を必要としたことが分かる。

以上、

小浜城三丸之外西津侍屋敷後浪留之石垣築候事、同西丸構之外南船入之方水留石垣築之、舟置候所ニ被仕度之由、書面之通得其意候、普請可被申付候、恐々謹言、

寛永十五寅

六月十五日

土井大炊頭

利勝（花押）

阿部豊後守

忠秋（花押）

松平伊豆守

信綱（花押）

酒井讃岐守殿（忠勝）

この奉書⁶⁾で許可された対象は、「三丸之外」などとあるように、城外の石垣普請であり、この場合は、將軍が許可するのではなく、老中が許可している。

以上、

伊予国大洲城三丸北西方隅櫓焼失付而、如元建之、櫓下石垣築直之事、同所堀式箇所如元懸之事、同所石塙塙箇所破損付而、繕之事、同所外堀浚之事、絵図朱引之通得其意候、願之通可有普請候、恐々謹言、

元禄十四巳

九月十五日

阿部豊後守

正武判

稲葉丹後守

正通判

秋元但馬守

喬朝判

小笠原佐渡守

長重判

土屋相模守

政直判

加藤遠江守殿（泰恒）

この奉書⁷⁾では、大洲城三丸の焼失した隅櫓の再建が許可対象となっている。このように、焼失した建物などの再建は、単なる修築作事とは別とされていたようで、その許可は老中によってなされている。

以上述べてきたように、寛永十二年の武家諸法度改訂以降の大名城郭普請については、石垣等新規の普請だけでなく新規の作事、さらに城郭の現状変更をとまなうものは武家諸法度改訂以前と同様、將軍の許可が必要であり、石垣の修築等の普請・再建等の作事は老中の許可事項

とされ、その他の修築作事は基本的には許可対象から外された。

- 1) 『譜牒餘録』中、198頁。
- 2) 『山内家史料』忠義公紀2、589頁。
- 3) 「酒井家文書」(『小浜市史』藩政史料編1、34頁)。
- 4) 「酒井家文書」(『小浜市史』藩政史料編1、36頁)。
- 5) 「後編薩藩旧記雑録」(京都大学文学部博物館写真版)。
- 6) 「酒井家文書」(『小浜市史』藩政史料編1、35頁)。
- 7) 「北藤録」15。なお、管見の限りでは、「絵図朱引之通」という文言が普請許可の奉書に入るのはこの奉書が最初である。

お わ り に

以上、慶長期、元和・寛永前期、寛永十二年(1935)の武家諸法度改訂以降の三期にわけて徳川氏あるいは幕府・将軍による大名城郭の普請および普請許可について検討してきたが、そこで明らかとなった諸点を整理し、その意義について述べ、まとめとする。

第一、慶長期徳川氏は、関ヶ原の合戦で敗れた毛利輝元の城地決定に干渉したものの、多くの大名の城郭普請に干渉することはできなかった。しかし、慶長十四年(1609)の福島正則の広島城普請に個別的とはいえ干渉し、新たに普請された部分を壊させたことは、これ以降、大名の居城普請を牽制するものとなったと思われる。慶長二十年の武家諸法度の城郭規定は、それまで個別的にしか干渉できなかった大名の居城普請を「法度」として、新城は禁止と居城修築は将軍への「言上」＝届け出とを定めた。このことは、軍事施設としての大名城郭が幕府の制御下におかれたことを意味している。しかし、この法度制定の直後には、この規定を遵守する大名もあったが、普請許可を要する普請がどのようなものであるかが明確でないこともあって、大名のなかには修築普請・作事の許可を得ることの必要性を十分には認識していなかったものもいたようであり、また、普請許可の奉書の初見が元和四年(1618)であり、またその形式も整っていなかったことが示すように、元和初年は、法度適用の方法を幕府自身が模索していた時期であった。そして、寛永前期を通じて幕府の大名城郭普請許可制は、形を整えて行き、寛永十二年の武家諸法度の改訂によって、なお、若干の紆余曲折があったものの、その後近世を通じての大名城郭についての普請許可制が確定する。

第二、幕府あるいは将軍が、大名城郭の普請・作事の許可対象としたのは、元和・寛永前期には、新規の普請・作事、修築の普請・作事、城郭の現状変更など広範囲におよんだが、寛永十二年の武家諸法度の改訂以降は、焼失した建物の再建などの作事を除いて修復作事は許可の対象からはずされた。これは、幕府による大名城郭の把握が進んだこととともに、多くの城郭がこの時期には作事部分の修築に迫られるようになり、その一々の修築許可に幕府が対応しき

れなくなったためと思われる。

第三、元和・寛永前期の大名城郭普請許可の主体は、新規・修築の普請・作事に限らず将軍あるいは大御所であり、普請許可の奉書を出した年寄たちにはその許可権はなかった。寛永十二年の法度改訂後、新規の普請・作事、城郭の現状変更についての許可権は、将軍が依然として掌握し、修築普請、城外の普請、焼失した建物の再建などの許可は、老中の掌握するところとなった。このことは、いっぽうでこの時期に江戸幕府の老中制が成立し、その権限が職制として明確化してきたことに連動したものであり、将軍政務の合理化の一環でもあったが、他方より重要なことは、新規の普請・作事についての許可権を将軍が掌握したことである。すなわちこのことは、大名城郭の詳細な情報を握り、その機能を制限することで、将軍が軍事施設としての大名城郭をその管轄下に入れていたことを意味しており、大名に抜きん出た江戸時代の将軍権力の軍事的性格をよく示すものである。

〔付記〕 本研究は、三菱財団人文科学研究助成金（近世および近代日本の国家構造）による財政的援助を受けた。記して謝意を表する。